

「疑問語」と「不定語」

大槻 美智子

キーワード：疑問語、不定語、指示語

I 問題の所在

- a. ここはどこか？
- b. どこかに行きたい。

同じく「どこか」の形をしていても、aの「どこか」は疑問であり、場所の名前や説明を答えとして要求する。それに対して、bの「どこか」は、「行きたい」場所であることは確かだが、どこははっきり指定できない（あるいはしない）ところを表している。これを「不定」と呼ぶ。

aの「か」を省いて「ここはどこ？」「ここはどこだ？」としても疑問の意味は損なわれないが、bの「か」を省くと「どこ*に行きたい？」と疑問の文になってしまう¹⁾。aの「どこ(か)」が疑問の意味を持つのは、疑問文の中で用いられているからだという考え方もある（奥津 1984・1985）が、上記のような現象をみると、「どこ」という語形そのものが、疑問文であることを要求しているのではないかと思える。これについては後述する。

そして、「か」を省いても意味が変わらないaは「どこ」と「か」に分けられるが、bの「どこか」は一語とするのが適当だと考える。

さらに、bの「どこか」は、「どこかに行きたい」「どこかを削りましょう」など、格助詞が「どこか」に直接つき、それ全体が名詞相当であ

ることを示している。一方、aの「どこ」も「どこが悪いの？」「どこを変える？」など、格助詞をとり、主語・補語などの文の成分となる。この点でも、「どこ」「どこか」は同等である。

以上のことからみて、「どこか」は、「どこ」の一用法ではなく、そこから派生した別形式と扱うのが適当だというのが本稿の主張である。

従来もそのような指摘がなかったわけではない（三上 1953、益岡・田窪 1992）。しかし、さらに詳しく「どこ」「どこか」が、どのような意味の文に現れどのような文の成分となるのかを検討してみることが必要である。

「どこ」「どこか」に類するものとしては、疑問の意を表す「だれ・なに／どれ・どちら（どっち）」とそれらに「か」が付いて不定の意味を表すものがあるが、今回は「どこ」「どこか」を中心に、それらの独自性を明らかにし、それぞれを別語として扱うという主張の根拠としたい。

また、「不定」を表す言葉には、「どこ(に)も」、「どこ(に)でも」、その他、の語形が存在している。ただ、これらを同時に記述することは煩雑になるので、「どこか」の性質を明らかにした上で、「どこか」との共通性や相違について述べることにしたい。

II 文の成分と文の種類

-「どこ」「どこか」を中心に-

ここでは「どこ」「どこか」が、どのような文の種類（疑問文か否か）において、どのような「文の成分」になるのかを見ていこうと思う。具体的には次の1・2にあげた項目に従って整理する。

1 使用される文の種類はどのようなものか。

疑問（反語を含む）

平叙（断定・推量・意志などを含む）

命令（依頼・勧誘などを含む）

一応上記のように分けたが、ここでは、疑問文とそれ以外という括りで説明していくことになる。

2 どのような文の成分になるか。

①述語

②主語（格助詞「が」がついた文節）

③補語（「が」「の」以外の格助詞が付いた文節）

主として上記3つの成分について検討する。連体修飾語（連体格助詞「の」がついた文節）は、「どの～」「どこかの～」のように、被修飾の名詞と連文節を作り、それ全体が文中で述語・主語・補語として働くことから、①～③の検討を中心にすることにした。独立語（感動詞など）については、「なに」にのみ見られる用法なので今回とりあげない²⁾。連用修飾語（補語以外、副詞相当のもの）については、必要に応じてあげることにする。

はじめに、疑問文における両者の相違から見ていく（例文の初めの○は文が成立することを、×は非文であることを表す）。

疑問文

①述語

○生まれはどこなの？ →九州です。

×生まれはどこかなの？ →？？

○生まれは九州のどこなの？ →長崎です。

○生まれは九州のどこかなの？ →はい。

②主語

○この答案のどこが間違っていますか？

→ここですよ。この計算がおかしいでしょ。

○この答案のどこか（が）間違っていますか？

→ああ、間違っているよ。

③補語

○（水槽をのぞき込みながら）亀はどこにいるの？

→あの岩の蔭だよ。

○（水槽をのぞき込みながら）亀がどこかにいるの？

→うん、いるよ。ここに。

○お弁当は、どこで食べよう？

→あの木の下がいいな。

○どこかでお弁当たべようか？

→そうだね。そうしよう。

以上の例文から、二つのことがいえる。一つは、「どこ」文の答えは特定された場所であり、「どこか」文の答えは述語の事態が存在するか否かだ、ということである。これを、奥津（1985）に倣っていえば、「ドコ疑問文」と「YesNo 疑問文」の違いということになる³⁾。二つめは、「どこか」を単独で述語にすることには違和感があるが、「九州の～」など、範囲を限定する言葉をつければ、疑問文の述語になることができるということである。なぜ、このような現象がおこるのだろうか。

まず、一つ目の事象は、「どこ」が疑問語であり、「どこか」はそうでないことを表していると考えられる。「どこ疑問文」は、「どこ」の部分が疑問である。疑問の「どこ」は、「生まれた／間違った／亀のいる／お弁当を食べる」場所が特定されていないことを表し、その不明の場所を特定しようとする。特定することが期されている点で「未

定」とも言える。そして、未定の空白部分に具体的な場所の名を要求するのである。このように、疑問文で、その部分に具体的な事物・人・様子などを答えることを要求する語を、疑問語と呼ぶことにしよう。

一方「どこか」は、疑問文で使用されていても疑問語ではない。「どこか」は、特定できない(しない)ある場所を、特定しないままに指し示す語である。だから、「生まれは九州のどこか／間違いは答案のどこか／亀は水槽のどこか」であればいいのであって、場所を特定する必要はない。むしろ、疑問の対象は「生まれは九州のどこかである」という事態の真偽・是非(「九州か九州でないか」)にあるのである。このことから、「どこか」文の答えは YesNo 式となる。他の例文も同様である。このように、疑問文とその答えのあり方も、「どこ」が疑問、「どこか」が不定であることを示している。

二つ目の現象は、述語になるには「どこか」は範囲を限定する言葉をつけなければならないということである。主語・補語の場合も、「この答案の／この水槽の／この辺りの」という範囲限定が、言語表現としてまた文脈として存在している。ただ、それを言語化しなくても文は成立するのだが、述語に関しては、範囲限定表現が必須のようである。

範囲限定がないと「人はどこかある場所で生まれるのか？」というナンセンスな問いになってしまう。「生まれる」ということは、必ずある場所で行われるのであってそれ以外のあり方がない以上、それを疑問にすることはできない。しかし、「九州の」と限定表現を付け加えると、出生地が九州か否かを問う文となる。これは、「どこか疑問文」が、命題を疑問の対象とすることを示している。すなわち、「どこか」自体は疑問語ではない。

また、「どこ疑問文」は、そこからの派生的な用法として、詰問や反語の意味をもち、疑問の答えを要求しないことがある。

- ・どこを見てるのよ?! しっかりしなさい。
- ・一体あの娘のどこがいいのかしら?

これらは、疑問用法の一種であり、「不定」の意味をもつとも言えないので、「どこ」の一用法である。

ところで、「どこか」は格助詞抜きでよく使われる。三音節ということも影響しているのかもしれないが、次のような例である。

- ・どこか具合がわるいのか? →いいや。
- ・彼女の態度はどこか変だろう? →そうだね。
- ・彼女、君の母親にどこか似てないか?
→そうだろう、僕もそう思ってたんだ。

これらは、「どこか(の)具合」「どこか(が)変だ」「どこか(が)似ている」など、格助詞が省略されているともとれるし、また「わるい」「変だ」「似ている」などの形容詞や状態動詞を修飾し「なんとなく」という状態を表すように変化しつつあるともとれる。後者になると、副詞である。

また、次の「どこか」の場合は、同格法とも呼びたいものである。

- ・温泉で、どこかいいところはないかい?
→あるよ。湯の花温泉がいいよ。
- ・どこか一ヶ所くらいは、初詣に行かないか?
→そうだな、行こうか。

同格といったのは、一方の語を省いて、「温泉で、どこかないかい?」「温泉で、いいところはないかい?」の両方が成立するように、「どこか=いいところ」が成り立つからである。そして同格の語が合わさって、全体として主語や補語となっている。

このように、助詞抜きで使われる例を含めても、「どこか疑問文」は、すべて YesNo 疑問文を作り、不特定の場所を表しているのである。

以上、述べてきたところをまとめてみる(表1)。

表1 疑問文

文の成分	どこ	意味	どこか	意味
①述語	○	疑問 (反語)	△ (範囲限定の言葉 がある場合は○)	不定
②主語	○		○	
③補語	○		○	

疑問文において使用される「どこ」「どこか」は、それぞれ「疑問」と「不定」の意味に使われ、全く独立した用法を保っていた。

疑問文以外

①述語

- ×彼の居場所は、この国のどこです。
- 彼の居場所は、この国のどこかです。

②主語

- ×このイスは、どこがゆるんでいる(ようだ)。
- このイスは、どこかがゆるんでいる(ようだ)。

③補語

- ×彼とは、どこで会ったことがある。
- 彼とは、どこかで会ったことがある。
- ×夏休みは、どこに行くつもりです。
- 夏休みは、どこかに行くつもりです。
- ×老人はどこを見つめているようだった。
- 老人はどこかを見つめているようだった。

「どこ」は、「疑問文以外」の文では使用できない。これは「どこ」自体が疑問の意味をもっているからではないだろうか。「どこ」が疑問語であるからこそ、文末に「か」や「？」を要求したと考えられるのである。

対して「どこか」は疑問文中でも、疑問の意味にならなかった。そして「疑問文以外」の文では、制限無く、述語・主語・補語いずれの成分と

もなり、文脈上想定できる範囲(イスの部分/彼と会いそうな場所/夏休みに行きたい・行けそうな所/老人の視界の範囲)の、ある場所を指定している⁴⁾。

また、同格用法も健在である。

- ・どこか遠くへ行きたい。
- ・どこかいいホテルを紹介してくれ。
- ・どこか一ヶ所ぐらいいは、実習を受け入れてほしい。

「疑問文以外」での両語の使用状況を一覧にしておこう(表2)。

表2 疑問文以外

文の成分	どこ	意味	どこか	意味
①述語	×	(疑問)	○	不定
②主語	×		○	
③補語	×		○	

表1・表2をあわせて見ると、「どこ」が「疑問」専用語であり、「どこか」が「不定」専用語であることが明かである。

さて、以上の例のほかに、一見すると、「どこか」に助詞「は」「も」が付属していると思われる例がある。

- ・どこかは(も)知らない。
- ・なにかは(も)わからない。
- ・だれかは(も)分かっている。

しかし、この「どこか」「なにか」「だれか」は、「不定」ではなく、「疑問(不明のもの内実を特定する)」の意であり、それぞれ次の文の省略形であると考えられる。

- ・その町がどこかは(も)知らない。
- ・それがなにかは(も)わからない。
- ・やったのがだれかは(も)分かっている。

主文の主語や補語となる節(傍線)に使用されているこれらの「どこか」は、範囲限定の語を持た

ずに節内の述語となっている。意味的にも、疑問の「どこ」「なに」「だれ」であることは明らかである（ただし、ここの「か」は省けない）。

ただ、この場合、主文は疑問文ではないので、名前など場所を特定する応答の必要はないが、この三つの文意を詳しく言えば、「“その町がどこにあるかに対して答える答え”を知らない」「“それがなにかに対しての答え”がわからない」「“やったのがだれかということの答え”が分かっている」ということであり、そこには疑問の対象を特定しようとする指向性がある。

また、以上の「どこ疑問文」は顕題疑問文であり、「どこがその町か」という陰題疑問文を節とする複文を作ることができる⁵⁾。

・私は、どこがその町かは(を)知らない。

・その町がどこにあるかは(を)知らない。

しかし、「どこか」は限定修飾語をつけても、上記のような、特定の答えを指向する疑問文を作ることにはできない。

×その町が地図のどこかか(は)知らない。

×地図のどこかかがその町か(は)知らない。

以上、複文の例にも言及することになったが、それは「どこ」と「どこか」の相違を述べるためであった。本稿では、複文についてはこれ以上言及しない。

ここまででわかったことを整理しておく、次のようである（表3）。

表3

	どこ	どこか
疑問文	疑問（反語） ・述語 ・主語・補語	不定 ・述語（範囲限定がある場合） ・主語・補語（同格法を含む）
疑問文以外		不定 ・述語 ・主語・補語（同格法を含む）

「どこ」は疑問文にのみ用いられ「疑問」を表す。一方「どこか」は、疑問文でもそれ以外でも、常に「不定」の意味をもつ。そのことも含めて「どこか」の特徴を整理しておく。

- ① 「か」を省くと意味が変わってしまう。
- ② 「が」「を」「に」など、格助詞が直接接続する。
- ③ 疑問文でもそれ以外でも常に「不定」の意味を表す。
- ④ 同格法という独自の用法がある。
- ⑤ 「は」「も」は直接接続しない（ただし「どこ」にも「は」はつかない）

以上の諸点から、b「どこか」は、「どこ」の1用法ではなく別形式とするのがよいと考える。

Ⅲ 「疑問語」と「不定語」

Ⅱにおける考察から、「どこ」を「疑問語」、「どこか」を「不定語」と名付けることにしたい。

ところで、この名称は、益岡・田窪（1992）にすでに見られるものである。両氏の分類を次にあげる。ただし、両氏の分類は、「どこ」にとどまらず疑問や不定の意味をもつもの全般についての一つの枠組みの提示である（p.39）。

疑問語－疑問文で用いられる。

指示詞の「ど」系列「どれ、どこ、(略)」

名詞「誰、何、いつ、(略)」

副詞「なぜ」

不定語－疑問語に「か」「も」「でも」のついた語。不定の対象を指し示す語。

「～か」不定の対象の存在を表す。

「～も」(否定表現を伴い)対象の不存在を表す。

「～でも」任意の対象を表す。

両氏の不定語は「～か」だけ与えられた名称で

はない。「～も」「～でも」も不定語としている。本稿では、さらに、「～も」「～でも」を含めた、以下にあげる6つのパターンをすべて「不定語(句)」としてよいと考えている。そこで、それらを「不定語」として独立させられるか否か、「どこか」と同様、使用される文の種類や文の成分等について検討をしておきたいと思う。

まず、「疑問文以外」での使用状況から見ていこう。

疑問文以外

(1) 「どこ(～)も」(全否定・全肯定)

- ・君はどこも悪くないですよ。(全否定)
- ・もうどこにも行きたくない。(ク)
- ・どこからも声がかからない。(ク)
- ・連休中はどこも観光客であふれている。(全肯定)
- ・うちはどこにもあるような零細企業ですよ。(ク)

「も」は、「どこ」に直接つく場合もあれば、「どこに」などの補語につくこともある(主語にはつかない)。この点、「どこか」が格助詞を後ろに従えるのに対して、「も」は格助詞の後ろにつくということになる。しかし、これは副助詞「も」の特徴である。

益岡・田窪(1992)は、この語形について「否定の表現を伴って対象の不存在を表し」(p.39)としているが、肯定の表現もあることを指摘しておきたい。「も」がつくことで、否定にしる肯定にしる、“該当する任意の対象をすべて含む意味”をもち、全否定・全肯定となると思われる。

ところで、「どこか」も「どこも」もそうだが、特定しないある場所というのは、無制限なのではない。「どこか静かな場所はないか」の「どこか」も「どこも悪くないですよ」という時の「どこも」も、あるいは「だれか助けてくれ!」「だれも助けてくれない」でも、「静かさ」「身体」「助ける力のある人間」など一定の性質・特徴を

もった範囲内のものを対象にしている。その範囲内の、想定できるすべての対象を含めば「全肯定」、すべてを含まないのなら「全否定」である。

(2) 「どこ(～)でも」(全肯定)

- ・席なら、どこでもかまわないよ。
- ・あれくらいの演技力の俳優ならどこにでもいる。
- ・パンくらい、どこででも買えるさ。

(1)と同様、「～でも」も格助詞の後につく。

益岡・田窪(1992)は、この語形を「任意の対象を表す」としているが、「該当する任意の対象すべてを表す」としたい。

(3) 「どこ(補語のみ)+動詞+ても」(全否定・全肯定/条件法)

- ・病気は、どこに行っても、良くならない。(全否定)
- ・どこをたたいても、なにも出ない。(ク)
- ・この村は、どこをとっても美しい絵になるよ。(全肯定)
- ・どこへ行っても大歓迎だった。(ク)
- ・どこからみても完璧だ。(ク)

条件節を作るこの形式には、格助詞のない「どこ」は使えない。裸の「どこ」が使えるのは、次の(4)である。

(4) 「どこひとつとっても」(全否定)

- ・どこひとつとっても、彼にはかなわない。

「どこ」の代わりに「だれ」「なに」をいれることもできる。「だれ」を入れると「だれひとりとっても…」となる。

(5) 「～ひとつ(ひとり)として」(全否定)

- ・だれひとりとして、助けに来なかった。
- ・なにひとつとして、揃っていないものはなかった。
- ・どれひとつとして、同じものはない。

この形は「どこ」ではあまり使用されないが、「だれ」「なに」「どれ」では取りあげるべき形式である。また(4)(5)は、(3)と違い、裸形のみが使用でき、補語などは入らない。

(6)「～と(も)なく」(漠然とした状態)

- ・上座に坐るのは、どことなく落ち着かない。
- ・その男は、どこともなく去っていった。
- ・どこからともなくいいにおいが漂ってきた。
- ・彼は、誰にともなく話したくなった。

以上(1)～(6)の形式は、すべて「不定」の意味で用いられている((6)は副詞句として考えるべきものだろう)。そしてそのすべてが、“該当する任意の対象をすべて含む意味”をもち、全否定または全肯定となるものばかりである。よってこれらの形式を「不定」の「全指定」とすることにしたい。これに対して「どこか」は、

- ・どこかに行きたい。
- ・どこかで見たことのある顔だな。
- ・どこか遠くへ行きたい。

のように、可能性のある任意の対象のひとつを個別に指定すると言えそうである。「個(別)指定」と名付ける。

また、「どこか」は肯定文で用いられる。通常これを否定文にすると、「どこにも」になる。

- ・どこかに行きたい。
- ・どこにも行きたくない。

あるいは、次のような例から「どこか」は、否定文でも用いられるとされるかもしれない。

- ・どこかに食べに行かないか？
- ・どこかに行きたくないかい？

しかし、これは「～ないか(い)？」の形で、一種の勧誘文になっていると見るべきだろう。

・どこか(に)行きたくないところがあるかい？
のような文も、「どこかに」は「ある(か)」にかかっていて、「ない」とは呼応していない。この

ように、「どこか」は肯定と呼応する⁶⁾。この点においても、他の6つのパターンと対比的である。

では、以上考察してきた6つのパターンは、疑問文においても、「不定」の意味で使われるのだろうか？ 答えはイエスである。(1)～(6)の語形式はすべて疑問文にすることが可能である。返答も当然 YesNo 式である。簡単に示す。

疑問文

(1)「どこ(～)も」

- ・君はどこも悪くないですか？ →はい。
- ・連休中はどこも観光客であふれていましたか？ →いいえ

(2)「どこ(～)でも」

- ・席はどこでもかまわないですか？ →はい。
- ・料理はなんでもいいですか？ →はい。

(3)「補語+動詞+ても」

- ・どこからみても完璧ですかね？ →いいや。

(4)「どこひとつ(ひとり)とつても」

- ・どこひとつとつても、彼にはかなわないですか？ →そうですね。

(5)「～ひとつ(ひとり)として」

- ・だれひとりとして、助けに来なかったのか？
→はい。そうです。

(6)「～と(も)なく」

- ・上座に坐るのは、どことなく落ち着きませんか？ →はい。そうですね。

以上6つの形式は、次の理由から、「不定語(句)」と称してよいと考える。

①「も」や「でも」など特定の形式を省くと文として成立しない。

②文中で連用修飾語(句)となり、疑問文でもそれ以外の文でも常に「不定」の意味を表す。

さて、述べてきた6つの語形式と「どこか」との違いは、どのような「文の成分」になるか、

「個指定」か「全指定」か、否定と呼応するか否か、という点にあった。この点を含め、今まで考察してきたところを一覧にして示す（表4）。

表4

語の種類			疑問文	疑問文以外	
疑問語			どこ* 述語・主語 補語		
不定語	個指定	肯定	どこか* 述語△ 主語・補語	どこか* 述語 主語・補語	連用修飾語 (句)
		否定	どこも		
	肯定	どこでも			
	全指定	否定	どこ一つとして ／とつても		
		仮定	どこを～ても		
		状態	どこと(も)なく		

*は格助詞のついた語形を含む。
△は範囲限定の修飾表現がある場合に成立することを表す。

IV まとめ

本稿では、「どこ」を中心に記述したが、「だれ・なに・どれ・どちら」なども、「疑問語」と「不定語」に分けることができる。

「どこ」類が単独で使えるのは疑問文中であり、そこで「疑問」の意味をもち、対象の説明や名前という答えを要求し“対象を特定しよう”とする。それに対して、「か」「も」「でも」などがついた語形は、疑問文か否かにかかわらず、“対象を特定しないままに指示”する「不定語」であることを明らかにすることができた。また「不定語」内の相違点についても言及した。

最後になるが、従来のこの問題に対する諸家の説を、「どこ」「どこか」で代表させて整理しておきたい（表5）。

表5

	a どこ(か)	b どこか
松下大三郎 (1930)	疑問名詞 〈疑問用法〉	疑問名詞 〈不定用法〉
佐久間 鼎 (1940)	不定称代名詞 〈疑問〉	不定称代名詞 〈不問〉
三上 章 (1953)	疑問詞 疑問名詞(ドコ) 疑問代名詞(ドレ)	不定詞 不定名詞(ドコ) 不定代名詞(ドレ)
奥津敬一郎 (1984)	不定詞(+疑問文末 詞)	不定詞+選択並列詞
益岡・田窪 (1992)	疑問語 指示詞 ド系列 名詞 誰・何… 副詞 ナゼ	不定語 指示詞 ド系列 名詞 誰・何… 副詞 ナゼ

これを見ればあきらかなように、「どこ」「どこか」の問題は、品詞論の問題であった。今回は品詞に関してはほとんど触れなかった。筆者の立場としては、三上や益岡・田窪のように、疑問語・不定語を設定し、その中にさまざまな品詞の語を集めるということになるだろう。それには、さらに副詞的な「なぜ、どうして、どのように、どんな」などの語も含めてその体系全体を考察しなければならない。

また、三上章のいう指定(代名詞)か措定(名詞)かの問題も残されている。構文論の問題も視野に入れれば、「どこか」が生まれてきた過程についても、言えることがあるのだろうと思う。今回は、「疑問語」と「不定語」を分けることとその根拠を示し、「不定語」を二種に分けたところで、考察を終えたい。

注

1) 奥津(1984)は、二つの「か」のうち、aの「か」を疑問文末詞、bの「か」を選択並列詞と称する。本稿では品詞の問題は措く。

2) 「なに」の感動詞的用法としては、「なに、それは本当か!」「なに、なんとかなるさ」「なに、知ったことか」などがある。

また、「なに」に独特のものとして、「例のなに

はどうした?」「なにを持ってきてくれ」など、特定しているものの名前を、あえて言わないために使用することもある。これと、松下(1930)が「不定名詞」としている「だれそれ、それがし、某(ボウ)」などと同じかどうかの検討も必要である。

- 3) 奥津(1984)は「ドッチ」について論じたものであるが、その中で、ドッチ疑問文と YesNo 疑問文という用語を用いて、この二つの違いを説明している。
- 4) 奥津(1985)に、本論の趣旨とは異なるのだが、「どこ」が指示する場所は無制限ではないことについての記述がある。
- 5) 顕題・陰題等の術語は、三上章の一連の著作に拠っている。本来顕題は「は」が使用されるが、主文に「は」があるため、節内では「が」助詞が使われたと解される。
- 6) 「どこか」も副詞用法では「どこかたのしくない」のように否定形にかかっている。

引用文献

- 松下大三郎(1930)『改撰標準日本文法』(1996年勉誠社より復刊)
- 佐久間鼎(1940)『現代日本語法の研究』(1983年くろしお出版より復刊)
- 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院(1972年くろしお出版より復刊)
- 奥津敬一郎(1984)「不定語の意味と文法-「ドッチ」について-」『都大論究』21号 東京都立大学国語国文学会
- 奥津敬一郎(1985)「続・不定詞の文法と意味」『人文学報』173号 東京都立大学人文学部
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本文法-改訂版-』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子(1999)『現代副詞用法辞典』
- *特に明記しなかったが例文をあげるにあたり、本書の例文を利用、または参考に自作したところがある。